

カリキュラム・教科書・アセスメントコンポーネント

ニュースレター（第2回）

カリキュラム・フレーム案の議論、ようやく委員会にて始まる

ミャンマー国初等教育カリキュラム改訂プロジェクトにおいて、小学校の教科書や教員用指導書を開発していく上で、その根拠となるカリキュラム・フレーム（教育課程）案の議論がようやく開始されました。7月22日（火）ヤンキン教育大学の大講堂において、第1回 Subject-Wise Committee 会議が開かれ、約140名の教育関係者（大学教授などの各教科専門家）が一同に会し、その内容について議論が行われました。Subject-Wise Committee というのは、カリキュラムや教科書など同国の教育内容について決定権のある組織で、ここで決定されたものが同国の教育指針として全国に普及されます。

この日の会議は、午前中が同国でカリキュラム開発を支援している UNICEF（幼児教育）、JICA（初等教育）、ADB（中等教育）より各組織のカリキュラム開発における役割と責任についての発表があり、昼食をはさんで午後からは、幼児教育、初等教育、中等教育という順でカリキュラム・フレーム案の概要（目標、教科の構成など）について発表が行われました。その後、小グループに分かれ、意見交換が行われ、原案に対する追加事項や要望が出されました。本会議で出された重要な点としては、政府は全教育段階において ICT 教育を推進していく意向であり、その旨をカリキュラム・フレームに明記するようとの指示が出されたことです。また、各委員から出された主な意見としては、①「英語」の時間数を増やしてほしい、②「ライフスキル」は独立した教科としてほしい、③「農業」を教科として導入してほしいなどです。これらの意見は、現時点ではあくまで要望レベルで正式な決定事項ではありません。教育省では、今後も引き続き、同会議を開催し、委員の間で意見交換しながら、カリキュラム・フレームの内容を固めていきたいということでした。



ここからは私見ですが、第1回 Subject Wise Committee 会議に参加し、そこでの議事の進行、発言の内容等を目の当たりにして、「カリキュラム・フレームの最終決定までの道のりはまだまだ遠い」という印象をもたずにはられません。今年9月という現在の目標はかなり厳しいというのが正直な印象です。もしかすると、今年一杯、あるいは年をまたいでしまうことも大いに考えられます。

Subjects	Grade 1		Grade 2		Grade 3		Grade 4		Grade 5	
	Annual	Weekly	Annual	Weekly	Annual	Weekly	Annual	Weekly	Annual	Weekly
Myanmar Language	252	7	252	7	216	6	180	5	180	5
English	72	2	72	2	72	2	72	2	72	2
Mathematics	180	5	180	5	180	5	180	5	180	5
Nature Studies	108	3	108	3						
Basic Science					108	3	144	4	144	4
Social Studies					108	3	144	4	144	4
Physical Education	72	2	72	2	72	2	72	2	72	2
Life Skills	36	1	36	1	36	1	36	1	36	1
Aesthetic Education	72	2	72	2	72	2	72	2	72	2
Moral Education	36	1	36	1	36	1	36	1	36	1
Local Curriculum	72	2	72	2	72	2	72	2	72	2
<b>Total</b>	<b>900</b>	<b>25</b>	<b>900</b>	<b>25</b>	<b>972</b>	<b>27</b>	<b>1,008</b>	<b>28</b>	<b>1,008</b>	<b>28</b>

左表は、委員会で出された意見をもとに原案を改訂したものです。なお、まだ次のいくつかの点において検討が必要です。

- ①英語の時間数
- ②ライフスキルの内容
- ③農業導入の可否
- ④ローカル・カリキュラムの取扱い
- ⑤ICT教育の取扱い

### 基礎教育法（案）が完成、ドナーとの議論始まる

これまで長らく議論されてきた「ミャンマー国基礎教育法（案）（英語版）」がようやく出来上がり、7月17日（木）にミャンマー教育関係者及びドナーを一同に会したコンサルテーション・ミーティングにて発表されました。この基礎教育法の特徴は、①ミャンマーの伝統や価値をもった市民の育成、②民主主義を实践するよき市民の育成、③平和と団結を重んじ、個人及び社会の多様性を理解できる世界市民の養成、④公用語としてのミャンマー語と第一外国語としての英語の強化、⑤児童（あるいは生徒）中心主義の教育の推進、といった点です。

### 教科書開発、手探りながら一步一步前進中

プロジェクトが開始されてほぼ2カ月が経ちました。当初、どのように教科書を開発していくか、具体的なイメージが抱けずに困惑していたカリキュラム開発メンバー（CDT）も日本人専門家の丁寧な指導の下、ようやく要領を得たようで、ゆっくりとではありますが、着実に新しい教科書を開発を進めています。現時点では、ほぼすべての教科グループにおいて、教科カリキュラムの内容（「01 Curriculum Outline」として取り纏め）は完了しています。そして、その内容をもとに、第1学年の最初の2～3単元について指導案（「02 Learning Process by Unit」として取り纏め）を作成しているところです。出来上がった「01 Curriculum Outline」を見てみると、どの教科においてもよく考えられた内容構成となっていることが分かります。日本人専門家の丁寧な指導はもちろんですが、CDTの不断の努力の結果とも言えます。



他方、一部の教科、例えば、英語、社会、ライフスキル、農業は、新しいカリキュラムの中での位置付けが未定であることから、なかなか本格的な作業に入れないというジレンマを抱えています。とりあえずは、暫定的なカリキュラム・フレーム案にもとづいて作業を行っていますが、カリキュラム・フレームが決定した時点で再度、教科書開発方針を検討していかななくてはならないかもしれません。

### ヤンゴン日本人学校との協力始まる

7月10日（木）ヤンゴン日本人学校を訪問し、置田和永校長と話し合いをもちました。訪問の目的は、本プロジェクトの効果的な実施のために、将来的に同校に対しての協力を依頼することでした。現在、CDTが新しい教科書を開発していく上で大きな障壁の一つとなっているのが「これまでの伝統的な教科書のあり方」という考え方です。つまり、これまでの教科書というのは、教師にとっては「教える内容」が具体的に書かれたものであり、生徒にとっては「学習する内容」そのものといった位置付けでした。したがって、教師は教科書を朗読し、生徒はそれを暗記暗唱するという教授学習方法が広く見られていました。

これから新しく開発していく教科書は、これまでの考え方を打ち破り、知識の習得だけではなく、生徒の学習過程を重視し、物事について深く考え、思考しながら自ら解決策を見出していく問題解決能力やグループ学習のような協働的な活動を通して自らの考え方の振り返りながら学習することのできる協調力、省察力といった能力やスキルも同時に養成していけるようなものを目指しています。当然のことながら、この新しい教科書は、授業を实践する教師に新しい使い方が求められます。「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」という使い方です。

そこで、この新しい使い方についての具体的なイメージをもってもらうために、ヤンゴン日本人学校において公開授業と担当教科の先生方との討議に場を提供してもらうことをお願いしたところ、快く了承していただきました。まずは、CDTと同校教職員の顔合わせということで、第1回目の会議を8月18日（月）15:00に予定しています。



ダウンタウンにあるヤンゴン日本人学校

**コラム：プロジェクトメンバー、「ワゾー満月」のお祝いに招待される**

去る7月16日（水）及び17日（木）には、「ワゾー満月」のお祝いをするということで、プロジェクトメンバーがヤンキン教育大学と付属小学校から連日招待され、先生方と一緒に楽しい昼食のひと時を過ごしました。この「ワゾー満月」というのは、お釈迦様が悟りを開いた後、修行中に世話をしてくれた弟子5人に仏陀になって初めてお経を教えた日とされ、ミャンマー仏教徒にとってはとても大事な日になっています。ミャンマーの人々はこの日に僧侶に袈裟を寄付する儀式を行います。



以上